

# 中国教科書の歴史認識

森 雅 雄

## 1.

日本の中学校用の『新しい歴史教科書』はその前書きに「歴史を学ぶのは、過去の事実を知ること」ではないと述べている。そしてそれは「過去の事実を厳密に、そして正確に知ることが可能ではないからでもある」としている。従って「人によって、民族によって、時代によって、考え方や感じ方がそれぞれまったく異なっているので、これが事実だと簡単に一つの事実をくっきりえがき出すことは難しい」とも言っている〔西尾ほか 2001:6-7〕。この教科書が批判を受けたのは、「人によって、民族によって、時代によって」異なる筈の歴史が「民族」の歴史に収斂したことにもよるのだろう。しかし、少なくとも、この教科書の言うように「国の数だけ歴史があっても、少しも不思議ではない」のだとすれば、中国には中国の歴史があるということになる。

本稿では、中国の中学校教科書『義務教育課程標準実験教科書 中国歴史』八年級上冊を中心に、その歴史記述と表現の特徴を見る（以下 2001 年教科書と呼ぶ）。教科書は北京市中関村南大街の魏公村にある人民教育出版社の書店で購入できる。この通りは以前の白石橋路で、名前も変わったが、景観も見事に都市化された。その中で一際目立つのが人民教育出版社の建物で書店はその脇から入る。

この教科書は、国家教育部制定の「義務教育段階国家歴史課程標準」に依拠している。「国家歴史」、即ちナショナルヒストリーである。2001 年秋から全国の各実験地区で使用されている。3セット6冊あり、そのうち中国史は2セット4冊、世界史は1セット2冊、義務教育9年のうち7～9年生、即ち日本の中学生の段階で使用される。8年生の上巻が中国近代史に当たり、7単元 22 課に分けられる。これを1課当たり1校時 45 分で学ぶ。本稿ではこのうち、日本とも関わりあう対外関係を取り扱った第1単元の5つの課と第4単元の3つの課を取り上げる。

各課は構成要素として、導入部のコラム、本文、青地が掛けられたより詳細な記述のある文章、当時の歌謡・新聞記事・当事者の文章や言葉の一節を紹介する囲み記事、図像・グラフ・地図・表の類、「頭を動かそう」という問いかけ、練習問題、討論や映画鑑賞などの「活動と探求」、「自由閱讀カード」といった多彩な要素からなる。「活動と探求」「自由閱讀カード」は新しい工夫である。このうち、本文や青地の掛けられた文章は「歴史」を「陳述」するものと考えられるが、図像はそうするものではない。図像の人物の面貌は、その名前もそうであるが、彼が英雄であることと必然的な関係はない。彼の行為をその面貌や名前に結びつけて記憶させるだけである。教科書に彼の図像を掲載するのは、それが何かを「陳述」するからではなく、それ以外のことをするからである。「陳述」ではない働き、そのことをオースティンからその用語だけを借りて、「事実確認」に対して「遂行」と呼ぼう。当時の歌謡や新聞記事の掲載についてもそのような効果が図られているだろう。「頭を動かそう」という問いかけや練習問題はそもそもが陳述文ではなく疑問文である。映画鑑賞による感想文も同様で「事実確認」をしているわけではない。本稿ではこのような「陳述」「事実確認」と「遂行」とい

う働きの違いにも留意する。

2001年教科書の一つ前の教科書は、3年間の実験的使用を経て、1992年秋からあまねく使用されているものである（以下1992年教科書と略記）。この教科書は日本語に翻訳されている。中国史の部分の4冊は各27課、ただし第3冊は1993年に9課増やされて36課となった。ここで取り上げる、2001年教科書の第1単元5つの課の部分は1992年教科書では第3冊中の10課分、第4単元3つの課の部分は1992年教科書第4分冊中の5課分に相当するから、2001年教科書は随分スリム化されたわけである。スリム化については、1989年の改革でそれまでの「知育偏重を見直し、学習内容の軽減と多様化を図った」〔関根 1988:9,14〕というから、これは既に1992年教科書から始まっていたことになる。

更にその前の、1980年から6年間の試用期間を経て1986年に正式に制定された教科書もその一部が影印・翻訳されている（以下1986年教科書と略記）。

また、高校の教科書も大きく変わっているようで、新しい「普通高中課程標準実験教科書」は部門史となっており、その『歴史1（必修）』（2004年、2006年改訂）が「人類政治文明発達史」、『歴史（選修3）』（2005年）が「20世紀の戦争と平和」となっている。この前の教科書は、2000年に第2版が出されたものであり、これも翻訳されている。

以下では、これらの教科書も適宜参照し、変わったところと変わらぬところ、すなわち当局の力点の置き所やその移動を見る。

## 2.

第1課は「アヘン戦争」である。

「19世紀前半、英国は最強の資本主義国となっていた。国外市場を開き工業製品を売りさばき廉価な工業原料を掠奪するために英国は侵略の矛先を中国に向けてきた」と始められるその調子は、この歴史教科書が「侵略」の「ストーリー」を描いていることを明確に示している。日本の『新しい歴史教科書』や『詳説世界史』ではここに「資本主義」の言葉は出ないし、「掠奪」や「侵略」の文字も見えない。イギリス騎兵がランスを外したのは1928年。第2次大戦の劈頭に至ってもポーランド槍騎兵はドイツ機甲部隊に対して文字通りに矛先を向けて突撃しようとしたけれども、やはりこの「矛先」は実際に向けられたものではないだろう。ならば紋切り型かも知れないがここで換喩を用いていることになる。

教科書は続けてこう述べる。「英国は中国に向けて毛織物、綿布を輸出したが、なかなか売れなかった。むしろ中国から大量の茶葉、生糸、磁器の輸入が必要であった。〔……〕その結果、多くの銀が中国に流入した。その後、英国は毒物のアヘン貿易に従事して、暴利をむさぼることができることに気づき、中国に向けてアヘンの密貿易をし、多くの白銀を英国に流入させ、中国をさらに貧困にさせた」。その原因を英国の輸入超過とその打開策としてのアヘン輸出とする叙述は『新しい歴史教科書』も含めて日本の教科書と変わらぬとも言える。しかし、「工業製品を売りさばき廉価な工業原料を掠

奪する」という「資本主義」が導出する「侵略」の構造とアヘン輸出の没義道とは簡単に短絡され、一つのストーリーとして描かれる。あるいは、資本主義の悪弊は「最強の資本主義」に現れるというなら、それは資本主義「一般」の話ではなく、英国「単独」の話ということになるかも知れない。茶葉や磁器も工業原料とはいえない。

そしてそれは「中華民族に深重なる災難をもたらした」のである。「中華民族」の語はこの教科書にも 1992 年教科書にも度々登場する言葉であるが、多民族国家中国を同じ「民族」の名をもってまとめてしまうのは屋上屋を架すが如きレトリックである（なぜ「国民」という審級を導入しないのだろうか）。

そこに林則徐が登場する。彼の上書を引用し、アヘンを没収して廃棄する様子は 1992 年教科書に比べて簡潔になったが、日付まで入れて具体的で臨場感は失っていない。

そして、彼を「恥じることない民族英雄に値する」と評価する。以後、要所要所に英雄が登場する。アヘン没収の結果英国が始めた「侵略戦争」においても広東水師提督関天培の英雄的活躍がコラムで取り上げられ、「兵を率いて奮起抵抗、自ら大砲に点火して敵を攻撃した。まさに英軍が砲台の上で取り囲んだ時、関天培は腰の刀を抜き放ち、敵と格闘し、数十ヶ所の傷を受け、最後は砲台上で戦死した」と劇的に語られる。1992 年教科書では 3 課にわたっていたアヘン戦争の配当は 1 課にまとめられているが、臨場感あふれる装飾的な表現を全部削って平板な記述にするのではなく、挿話の数を減らし（例えば江南提督陳化成の壮烈な戦死は省かれる）、表現をいくらか簡略にしても（関天培の「鮮血は衣服、鎧にまで染み通ったが、それでも敵と組み打ち」の部分は割愛された）、英雄の活写という手法は残すのである。

また、広州の詩人陳澧の「炮子謡」を紹介して当時の雰囲気に触れさせるコラムもある。

更に英軍の侵略ルートを図示するのは、その記号表現としてはその侵略ルートを「陳述」しているのであるが、それが「遂行」するものは彼の侵略を視覚的に実感させることであろう。なお、この地図は 1992 年教科書にもあったが、ここで、省名については福建だけが、大陸と台湾島の両方にまたがって黒々と付け加わっていることは興味深い。台湾の強調は、1995 年の李登輝訪米を切っ掛けにして翌年に起こった台湾海峡危機がその背景にあるものと思われる。また、今更その位置を知らぬ者もないだろう香港島を示す地図もあるのもその位置を「陳述」するためではなく、中国の領土から割譲されたことを強く意識させるためであろう。

最後の「活動と探究」では、映画『林則徐』や『アヘン戦争』を見て感想文を書かせる。このような映画を見せる工夫は 2001 年教科書のものである。

### 3.

第 2 課は「第二次アヘン戦争期間における列強の侵華罪行」である。

日本の教科書ではむしろ「アロー戦争」として知られ、その切っ掛けとなったアロー号事件の顛末も記される。アロー号事件は、1992 年教科書にはあったのだが、ここでは削られた。「アヘン戦争以

後、西方の列強は既得権益に満足せず、さらに一步を進めて中国市場を開こうとして侵略権益を拡大した」と始められるだけなのは、ひたすら伸張する侵略のストーリーが本筋なので、アロー号の一件は間伐してもかまわない枝葉なのである。

間伐されないのは英仏聯合軍の北京圓明園での振る舞いであり、それが本文の記述の中心となる。「彼らは先を争い人後を恐れて珍宝を掠奪した。持ち帰れぬものはすなわち打ち砕いた。人の耳目から隠すため、彼らはまた放火して焼き払った。圓明園の大火は三日三晩燃え続けた。往日の光り輝く宮殿、天にも届く古木は皆灰燼と化した」。全体に簡潔な名調子で、「光り輝く」や「天にも届く」など、隠喩も駆使して、日本の教科書の、出来事を並べ立てる歴史年表の如き質朴なるゲシヒテに比べて、文彩鮮やかに情に訴えるヒストリーとなっている。この条の見出しになっている「火燃圓明園」は映画のタイトルで、課末の「活動と探究」ではこの映画を見て、感想を述べさせることになっている。

続く「ロシア、我が国の広大な領土を侵略占領す」の条では、1858年の愛琿条約以降、ロシアが中国から奪った「北方領土」の一覧表と地図を載せる。表や地図には面積も記載されている。同様の地図は日本の『詳説世界史』にもあるが、ここでは香港の地図と同様、あるいはそれ以上に中国から奪われた領土が実感できるようにになっている。しかし、中露が線引きするこの地域に住んでいる漢民族でもロシア民族でもない民族に想像の力が及ぶことはない。彼らは後に独立運動を展開することになる。なお、中国の教科書では「庫夏島」（樺太、サハリン）も1860年の中露北京条約で奪われた中国領土の中に入っている。中国ではネルチンスク条約で、黒龍江とウスリー江流域、庫夏島を含む広大な地域が中国の領土であることを認められたと学ぶからである。この条約が結ばれた時は、間宮海峡は未だ発見されていなかった。間宮林蔵が海峡を発見したのは1809年、シーボルトが『日本』でそれを紹介したのは1832年、林蔵の地図「黒龍江中之洲并天度」を発刊したのは1851年のことになる。『詳説世界史』では、1854年の日露和親条約で「樺太は両国民雑居の地として境界を定めない」ことが約定されたとある。

最後は「太平軍、洋槍隊を抗撃す」の条である。日本では「太平天国の乱」という。「槍」は鉄砲の意。本文は次のように始まる。「アヘン戦争は中国に深刻な結果をもたらした。戦後、人民は清朝統治に対する闘争を始めた。風起り雲が涌く」。1992年教科書では2課配当だったのが、条にまで縮められたにもかかわらず、この隠喩が新たに付け加えられた。1992年教科書では詳細に記された太平軍の戦闘も大いに省略されるが、1862年9月慈溪の戦闘で米国の鉄砲隊長ファールを撃ち殺したことは落としていない。ファールの写真までも載せ、このことを歌った慈溪一帯に伝えられている民歌は2001年教科書で付け加えられた。太平天国運動の簡略化はこれが清朝統治に対する闘争だったからであろうが、ファールは外敵なので落とせないであろう。

#### 4.

第3課は「新疆の回復」である。

「新疆は中国西部の要衝で、古来中国の領土であるにもかかわらず、1860年から70年代、インドを支配している英国と新疆と領土を接しているロシアは虎視眈々と新疆を奪おうと思っていた。新疆は危機に直面していたのである」。この書き出しの部分は1992年教科書にはなかった。新疆が中国古来の領土であることの確認はこの地域をめぐる政治的状況の反映であろう。「虎視眈々」や「新疆は危機に直面していたのである」という表現も文学的な表現と言える。本文は次のように続く。

「1865年、中央アジアのコーカンド・ハン国はヤクブ・ベクを派遣して新疆に侵入、カシュガルを占領した。ヤクブ・ベクはディドシャルを建国、自立してハンとなった。〔……〕英露両国ともヤクブ・ベクを支持することを通して新疆に進み支配しようとし、彼らはなんと中国の主権を無視して、ヤクブ・ベクの偽政権を承認した。〔……〕

1876年、左宗棠は清軍を率いて新疆に進入、〔……〕カシュガルを回収し、1878年、イリを除いて新疆は再び祖国の懐に戻った」。

導入部のコラムでも、左宗棠の業績を称えた詩歌が紹介され、また別のコラムでも彼の『奏稿』にある「新疆を重んずることは蒙古を保つためである。蒙古を保つことは京師を衛るためである」を紹介している。地政学者マッキンダーの「東欧を制する者はハートランドを制する。ハートランドを制する者は世界島を制する。世界島を制する者は世界を制する」を思わせるこの言葉も2001年教科書で新たに登場したものである。

1992年教科書では、同じ課の中で「アメリカと日本の台湾侵略」（後者は日本では「台湾出兵」と呼ばれる）、「イギリスの雲南・チベット侵犯」を取り扱っているが、2001年教科書ではなくなっている。1992年教科書ではこの後に「中仏戦争（清仏戦争）」（1884～85）が続くが、これもなくなっている。政治情勢の推移によって、今後どれかが復活するかも知れない。なお、この間1871年に結ばれた「日清修好条規」は、1992年教科書にも2001年教科書にもない。

#### 5.

第4課は「甲午中日戦争」である。日本では日清戦争という。

まず「1894年、日本は朝鮮征服の実現、中国侵略、世界に覇を称えるという夢のため、朝鮮国都の漢城に出兵し占領した。続いてまた侵華戦争を發動した」とある。朝鮮に対する清国の「夢」については考慮しない。すべては日本の「夢」に帰するのであるが、当時の日本が果たして「世界に覇を称え」ようとまで「夢」したかどうかの検証もない。

『新しい歴史教科書』や『詳説日本史』では、天津条約による日清両国の撤兵と将来出兵時の事前通告、甲午農民戦争の勃発と朝鮮政府の要請による清国の出兵、その事前通告とこれに対抗しての日本の出兵などという経過が書かれている。1992年教科書でも、農民蜂起、朝鮮の出兵要請、「日本も

機に乗じて兵を派遣」「日本政府は朝鮮の内政改革を援助するという口実を設けて、引き続き増派」と、日本の教科書とずれを見せながらも、その経過は述べられ、また、「1868年、日本の明治天皇は資本主義を発展させるのに有利な一連の改革に着手して、日本を速やかに資本主義の道へ進ませた。原料と商品市場の問題を解決するため、日本のブルジョワ階級は積極的に外へ向けての拡張を主張した。明治天皇は『万里波涛を開拓し、国威を四方に宣布すべし』と叫んでいた。そこで、日本は最初に侵略の矛先を朝鮮と中国に向けた」と記されていたのであるが、これらはここで日本の「夢想」に大きく簡略化され、資本主義が侵略を生むという理論への参照はなくなった。

高校の新しい教科書でも、「甲午中日戦争と八ヶ国聯合軍侵華」の課の冒頭導入のコラムでは、「1855年、日本の吉田松陰は『一旦軍艦大砲ほぼ充実し、便ち蝦夷を開拓して琉球を論し、これをして会同朝覲せしめ、朝鮮を責め、これをして納幣進貢せしめ、南満の地を割き、台湾、呂宋を収め、中国まるごと占領し、印度に君臨すべし』と公然と揚言した。明治維新後、軍事力の上昇に随って、日本は1887年に『清国征討策案』を制定し、『我帝国ノ独立ヲ維持シ国威ヲ伸張シ進シテ万国ノ間ニ巍立シ以テ安寧ヲ保続セント欲セハ〔支那ヲ攻撃シ〕今ノ清国ヲ分割シテ数小ノ邦国トナスニ非ラサレハ能ハサルナリ』と公然とわめいた。見るべし、日本の中国に対する侵略蓄謀の已に久しいことを」と述べられていて（教科書では〔 〕内の部分は省略されている）、日本の侵略の意図は1868年の天皇の「資本主義的」改革の前に遡ることになった。明治維新後も資本主義というよりは、「軍事力の上昇」によって侵略の意図を蓄えることになった。

松陰の文章は、正確な翻訳ではないけれども、『幽囚録』の一節であろうか（ただし『幽囚録』には中国占領や印度君臨のことは見えない）。しかし、もしそうならば、獄中の松陰から閉門中の佐久間象山に届けられたこの書を「公然」と揚言したと言っていいのか疑問である。またその後の「対策一道」に見られる「互市の利を征る」という彼の思想の委曲も採ることはない。点と点を結んで一直線に「侵略」の軌跡を描くのみである。戦前の日本で松陰は大いにもて囃されたが、この松陰像はその陰画というべきものであろう。『清国征討策案』は参謀本部第2局長小川又次大佐の書いた案文で〔山本 1964〕、「日本」が「制定」したものとは言い難い。参謀本部の「作戦計画」が「公然」とわめかれるものかどうかとも疑問である。

ついで話はいきなり黄海海戦に飛ぶ。1986年教科書には詳しく書かれ、1992年教科書にもあった豊島沖海戦の話も宣戦布告の話も平壤会戦やその戦闘における左宝貴の壮烈な戦死の話もない。しかも海戦の全貌を描くのではなく、またその歴史的な位置づけをするのではなく、その部分的な戦闘シーンである鄧世昌の奮戦を臨場感鮮やかに活写するだけである。この課の導入のコラムも「民族英雄鄧世昌を哀悼する挽聯」の紹介である。

その本文は次のように始まる。「1894年9月、中国北洋艦隊は護衛任務にあっていた。その帰路、黄海の大東溝で、日本艦隊の襲撃に遭遇した」。ここで「帰路」と書くのは任務中ではないものに対する不当な攻撃、また「襲撃に遭遇」と書くのは卑劣なスニーク・アタックであるという含意があるようだ。これは1992年教科書にはなく、新たに加えられたものであるが、1986年教科書では「旅順に向かって帰港しようとしたとき、黄海海上に米国の国旗を掲げた艦隊を発見した。正午近く、ます

まず近付いてきた十二隻の軍艦は突然、旗を全部日本の国旗に変え、北洋艦隊に対し襲撃してきたのである。海軍提督丁汝昌は応戦するよう命令を下した」と書かれていた。卑劣な日本は表現を変え、簡略化して復活したのである。

原田敬一によれば、16日、清国艦隊は運送船を護衛して、大東湾外1、2海里の地点に投錨。17日早朝に揚陸完了、午前8時返航準備の龍旗が掲げられ、9時操練開始、正午前に聯合艦隊とほぼ同時に敵艦隊を発見して接近を開始、聯合艦隊は「単縦陣」をとり、清国艦隊は「鱗次横陣」を構えた。午後12時50分、距離6,000メートルで口径に勝る「定遠」の主砲が発射されたのを皮切りに清国艦隊は砲撃を開始。口径で劣る聯合艦隊は距離3,000メートルまで砲撃を禁止し増速して接近、先頭艦「吉野」は12時55分、距離3,000メートルで砲撃した。本隊が砲撃を開始したのも12時52分からである〔原田 2008:131-133〕。

教科書は続けてこう書く。「日本艦は一直線に中国の旗艦を目指した。致遠艦長の鄧世昌は旗艦を守るために艦を指揮し先頭に立って敵艦を迎撃した。四隻の日本艦が致遠を包囲した。鄧世昌は沈着に応戦したが、船体に被弾多く、艦は大きく傾き、弾薬も将に尽きんとしていた。鄧世昌は部下に言った。『我らは従軍して国を守る。生死はもはや度外に置く。我らは犠牲になるといえども国家の尊厳を高めることができるのだ』。彼は全速力を下令し、日本艦に向かってぶつかりに行った。日本艦は慌てて避退し、同時に発砲し、致遠を撃沈した。鄧世昌と二百余名の戦士は壮烈な犠牲となった」。この英雄譚は1986年教科書にも1992年教科書にも高校用の新しい教科書でも一貫して載せられている話である。翻って日本の教科書では、『新しい歴史教科書』でも「勇敢なる水兵」三浦虎次郎の逸話や後に丁如昌を弔砲を放ち登舷礼式、帽振レで送ったことは書かれていない。

聯合艦隊は単縦陣で横陣の清国艦隊の前を通過しながら砲撃をしたのだから「一直線に中国の旗艦を目指した」というのも正確ではないだろう。鄧世昌が体当たり攻撃を敢行しようとしたのは英雄的な行為に見えるかも知れないが、清国艦隊は砲撃に加えて衝角で撃破しようとしていたので、特別のことではない。清国艦隊が横陣を構えたのも衝角攻撃を考えていたからである。1866年の「リッサ海戦」で単縦陣のイタリア艦隊に対して横陣のオーストリア艦隊が衝角攻撃で装甲艦を1隻沈めて以来、衝角の有効性と横陣が注目され、その後の四半世紀にわたって衝角が支配していたのである。

その後は、日本軍旅順占領後の住民虐殺2万人と台湾での戦闘についての青地が掛けられた記事と図像である。台湾の戦闘については1986年教科書では1条を設けて詳説し、1992年教科書では1課に格上げされていたものである。ここで記述は簡略化されたが、台湾義軍將軍の臨終に高く呼ばわった「丈夫は国の為<sup>ナ</sup>に捐つ、死して憾みなし」だけは囲み記事として抜き出して載せている。逆に、旅順虐殺は1986年教科書では触れられる程度の扱いだっただけで、1992年教科書から囲み記事を設けて詳述するようになった。しかし、虐殺の前にあった事態について述べることはない。

最後の「自由閲覧カード」は「中国近代最大の2隻の軍艦」で、2001年教科書から登場した。「鎮遠」の写真を載せ、「定遠」と「鎮遠」が「当時大変先進的で、日本のどの軍艦に比べても大きかった」とある。「定遠」は日本人の手に落ちることを避けるため、艦長の劉歩蟾は炸薬を仕掛けて自沈し、自らも自殺して殉国したと記す。「定遠」級は1884年の竣工。10年前の艦では「大変先進的」

とはいえまい。中央砲塔艦も過去のものになっていた。英国主力艦では最後の中央砲塔艦の「エジンバラ」が竣工したのは1887年である。「定遠」は2005年、威海市に復元展示された。「定遠」の写真は『新しい歴史教科書』にも掲載されているが、それは1886年、「北洋艦隊を、親善を名目に長崎に派遣してその軍事力を見せつけ、日本に圧力をかけた」と記す所にある。「定遠」の意味もまた、中国の教科書と日本の『新しい歴史教科書』とは違うのである。

## 6.

第5課は「八ヶ国聯合軍侵華戦争」である。

導入部のコラムは当時唱われた「義和団、山東に起こり、三月に到らずして遍地（一面に）紅にす」という歌謡の紹介である。本文は、「1900年春、義和団運動は北京天津地区まで広がった。闘争の矛先は真っ直ぐ帝国主義侵略勢力に向けられた。6月、義和団の反帝国主義愛国運動を鎮圧するため」、派遣された8ヶ国聯合軍の狼藉の記述と続く。

中国の教科書では「反帝国主義愛国運動」とその「鎮圧」であるが、『詳説世界史』では「排外主義団体義和団が勢力を増して各地で外国人をおそい、北京の列国公使館を包囲した（義和団の乱）。清国政府も義和団に同調して、列国に宣戦を布告した（北清事変）。日本をふくむ列国は、連合軍を派遣し、義和団を北京から追って清国を降伏させ、翌年には清国と北京議定書を結んだ」となる。

「《辛丑条約》は中国人民に新たな重い負担を増やし、中国の主権に嚴重な損害を与えた」。

その後にあった日露戦争の記述はない。高校の教科書の「20世紀の戦争と和平」にもない。

## 7.

第四単元に飛んで、第14課は「忘れ難き九一八」である。

ほとんどの日本人にとっては忘れ難いどころか、日付までは憶えていないものであるが、これは満州事変のことである。表題は、1992年教科書の「日本が中国侵略した『九一八』事変」という「陳述」的なものに比べて、情動的な表現になっている。導入部のコラムは「我が家は東北松花江の辺にある」と唱いだす「松花江上」を扱う。「この唄は、九一八事変後、東北人民が流離して居場所を失い、家破れ人が亡びる悲痛の現れであり、また日寇の我が東北の野蛮なる侵略への全国人民の憤懣を唱っている」と説明される。しかし、有田芳生によれば、この歌は1936年、張寒暉の作詞・作曲、「張学良から東北守備の放棄を命じられた東北軍の望郷の思いがそこには込められている」〔有田2005:168〕ものである。

本文は次のように始まる。「1931年9月18日夜、瀋陽北部、上空ニ彎月高く懸カリ、疏星点点トス。突然トシテ一声巨キク響キ、南滿鐵路柳条湖、一小段ノ鉄軌ハ炸カレ、東北大地ノ寧靜ハ打チ破レタリ」。思わず訓読文にしたいくなるような文章である。参謀本部の『満州事変史』でも「陰曆七日ノ月ハ高梁ニ没シテ暗ク星光淡ク輝クノミ」〔参謀本部 1933:4〕と詩的な表現が似ているのは興味



深い、月の位置は異なる。『満州事変史』には「午後十時頃ニ八月既ニ没シ暗黒ナリ」〔参謀本部 1933:14〕とも書かれている。「月出没時刻・方位角計算のページ」なるウェブページによれば、1931年9月18日は月齢5.9。北緯42度、東経123度で計算すると、当日の月没は月の中心で22時23分、東経124度で計算すると、22時19分だから、瀋陽辺りの月没は22時21分頃だろう。爆発は22時20分頃だから、「彎月」ではあったが、それは高く懸かっていたはなかったということになる。参謀本部が正しくこの教科書は誤っているわけであるが、しかしこの「陳述文」の意義がその真理値にないことは疑う余地もない。月が照り星が輝く平和な大地を日本軍は犯したという含意があるのかも知れない。

1992年教科書には月星の記述はないし、「爆破」とあるだけで「一声巨キク響」という表現もない。「1929年、資本主義社会で深刻な経済危機がおり、日本帝国主義は経済危機から脱却するために、中国侵略の歩調を速めた」と説き起こされていたのであるが、2001年教科書では逆にそれはなくなった。「侵略」する「資本主義」のドクトリンは、ここでも言及されなくなったのである。

『詳説日本史』では、これについて、関東軍が「中国の国権回収運動が満州におよぶのを武力によって阻止し、満州を長城以南の中国主権から切り離して日本の勢力下におこうと計画した」とし、「第2次若槻礼次郎内閣（立憲民政党）は不拡大方針を声明したが、世論・マスコミは戦争熱に浮かされたかのように軍を支持した」という書き方をしている。『新しい歴史教科書』でも「満州事変は、日本政府の方針とは無関係に、日本陸軍の出先の部隊である関東軍がおこした戦争だった。政府と軍部中央は不拡大方針を取ったが、関東軍はこれを無視して戦線を拡大し、全満州を占領した」と書いている。しかし、中国では、「まず満蒙を征せざるべからず」とする「田中上奏文」を史実として教えるように、これを政治指導者による一貫して構想された侵略と考えるから、これは論外である。これは毛沢東以来の「日本軍国主義有罪、日本人民無罪」とする政治方針にもよるが、日本人ならば実感できる「人の行動も含めて一貫性を重視する論理的な世界観が日本では成立しにくいこと」が「理念や道理を重視する中華の文明世界における文人エリートには耐えられ」〔伊藤 2007:132-133〕ずに、理念という枠組みにはめ込んでこれを理解しようとするということにもよるだろう。

次いで中国の教科書は、花谷少佐の戦後の回想録まで引いて記述は細くなるけれども、従って、日本政府の不拡大方針とか関東軍の独断という歴史の委曲の方には細かくならないのである。なお、1992年教科書には「偽満州国」建国の話は述べられているが、2001年教科書では略されている。

「日本軍が東北を占領した後、さらに侵略の魔の手を華北に向けた。中華民族生死の瀬戸際にあつて、中国共産党は全国抗日民族統一戦線建立の主張を提出し、国民政府に内戦を停止し一致して抗日にあたることを要求した」。「侵略の魔の手」は1992年教科書には書かれている「塘沽協定」（1933年）や「梅津・何応欽協定」（1935年6月）のことであろうが、それを極めて簡略化して表現しており、それ故／かつ、装飾的な表現になっている。それに「西安事変」が続くが、張学良は「偉大なる愛国者」と評価される。

## 8.

第 15 課は「寧ろ戦死して鬼となり、亡国奴と作らず」である。

この表題も 1992 年教科書では「神聖なる抗戦の開始」という、より「陳述」的なものであった。導入部のコラムには盧溝橋の説明と「盧溝橋、盧溝橋、男の墳墓はこの橋にある！」と歌う当時の「盧溝橋歌」の紹介で、これも 2001 年教科書から登場した。

本文は次のように始まる。「日本軍は我が東北三省侵略後、継続して南に向かってせまり、華北の占領を企図した。1936 年、日本軍勢力は東・南・北三面より北平を包囲し、形勢はなほだ危急となった」。「華北の占領を企図」は、1992 年教科書には明示されている「冀東防共自治政府」なる華北分離工作（1935 年 11 月）を約めたものであろう。約める際にそれを「占領」と約めたのである。明確で直截的なストーリーである。北平の包囲は、1992 年教科書に「北平の三方はすでに日本軍とその傀儡軍に支配されており」と書いてあることに該当する。「日本軍とその傀儡軍」を「日本軍勢力」にいくらか縮め、いくらか変えたのである。

続いて、盧溝橋が北平から永定河を越えて南方に通ずる唯一の地点であるという戦略的意味を説明する。この点については、「頭を動かそう」という問いでも取り上げて再確認させている。これは、1992 年教科書では先の北平三方の支配の記述に続けて「盧溝橋は南方およびその他の地区に通じる唯一の道路であり、軍事上争いの避けられない場所であった」とあるのに対応するから、盧溝橋の確保は北平包囲網の完成を意味するのであって、ここを通過して更に南方に侵攻するという意味では一応なさそうである。この認識は、1992 年教科書では触れられている、蒋介石の廬山での歴史的声明での認識、すなわち「盧溝橋が日本軍に占領されれば故都北平は第二の瀋陽（奉天）となる、北平が瀋陽になるならば、首都南京が北平の運命をたどらないとはいえない」〔臼井 1967:38〕に重なる。

次いで教科書は、盧溝橋と宛平城に駐兵する大隊の編成まで記した上で（4 個歩兵中隊、1 個重機関銃中隊、1 個軽迫撃砲中隊、1 個重迫撃砲中隊、計 1400 名とある）、「大隊長の金振中は周密なる防備体制を布き、時々刻々日本軍の行動を警戒した。強敵の増長する侵略の気焰に対して、大隊の全將校兵は共通の敵に対して一致して敵愾心を燃やし、食事前、睡眠前に全員が叫んだ」。彼らが叫んだ言葉がこの課の表題となっている。この一節は 2001 年教科書で新たに加えられたものである。日本の教科書では部隊編成、ことに大隊レベルの編成まで記すことはあるまい。

「1937 年 7 月 7 日晚、日本軍は盧溝橋付近で軍事演習を実施した。日本軍は一名の兵士の失踪を口実に、宛平京城の捜査を無理に要求し、中国守備隊の拒絶にあった。戦争を挑発する意志を蓄えていた日本軍は強硬にも盧溝橋の中国守備隊に向かって進攻を起こした。そして宛平城を砲撃した。中国守備隊は我慢しようにも我慢することはできず、奮起抵抗し、全国的な抗日戦争はここから始まった」。「口実に」というのは予め「戦争を挑発する意志を蓄えていた」ということである。1992 年教科書では先の引用に続けて、「7 日夜、日本軍は盧溝橋北側で盧溝橋進攻を目標とした軍事演習を行った」と明言している。最近の日中歴史共同研究委員会でも、日中戦争は「軍部の一部勢力に引きずられて戦線が拡大した」のか「計画的な中国への侵略」だったのか、日中に折り合いは着かなかったようで

ある〔『読売新聞』2009年12月22日付〕。

そして、7月8日明け方、日本軍「主力」が鉄道橋に突き進み、橋を渡ることを要求し、これを拒んだ2個小隊の戦闘を描く。「早くからすでに戦闘準備を完了していた日本軍は突然射撃を開始し、申小隊長は不幸にも弾を受けて戦死した。申小隊長の死は兵士たちの満腔の怒りに火をつけた。彼らは、数100名の日本軍の進攻に対して、毫も恐れることなく、6挺の機関銃と6,70挺の歩兵銃をもって、恨みの弾丸を一斉に撃った。敵が陣地に突入してくると、兵士たちはすぐに刀を振り回し、敵軍に突入、激烈なる肉弾戦を展開した。ほとんど全員が橋頭で戦死した。烈士の鮮血で廬溝橋は赤く染められた」。日本の教科書ではこのような2個小隊の戦闘まで書かれることはないだろう。

1992年教科書では「数百人」と書かれているだけで「主力」とは書かれていない。なお、この日の戦闘は、真夜中に豊台から進出してきた第3大隊主力によるものであるが、攻撃の中心は竜王廟と皇城への砲撃だった。しかし、それは記されない。北平包圍網を完成させる最後の廬溝橋の攻防戦がポイントなのであろう。また、「早くからすでに戦闘準備を完了していた日本軍は突然射撃を開始」というのは日本軍の狡猾な性格を表している（しかし、金振中大隊長は周密なる防備体制を布き、時々刻々日本軍の行動を警戒していたのではなかったか）。廬溝橋での戦闘シーンは、1986年教科書ではわずかに「全国人民の強力な支持の下に、廬溝橋守備隊の多くの将兵は日本の侵略者に勇ましく立ち向かい、廬溝橋をめぐって激しい白兵戦を展開した」と書かれた部分を拡大し、血肉化したものである。1992年教科書に比べても、申小隊長の話や銃器の記述などが加わり遙かに具体的になって活写されている。逆に、1992年教科書ではこれと同じ比重で語られる南苑の戦いは地名もなくわずかに触れる程度にまで縮小している。アヘン戦争での関天培の活躍シーンが欠かせないように、これらも申小隊長とその小隊の英雄的戦闘を描くということと同時に、戦略的要地たる廬溝橋とそれを狙う日本軍というストーリーを際立たせるためであろう。

次いで、第29軍司令部の命令、「前線ノ將校兵ハ断固抵抗シ、廬溝橋ハ即チ汝等之墳墓トシ、応ニ橋ト存亡ヲ共ニシ、後退ヲ得ベカラズ」が囲み記事で示される。1992年教科書ではこれが廬溝橋での戦闘の前に置かれており、本文では第29軍司令部の命令を受けるや兵士たちは「胸中にたぎる怒りをおさえることができず」という流れになっている。兵士の「怒りに火をつけた」のが申小隊長の戦死によるのか、それとも第29軍司令部の命令で「たぎる怒り」が噴出したのかどうかを問うことは最早無意味であろう。すなわちこれらの「陳述文」も、「陳述文」の形はしていても、その真偽を問うことに意味がない「陳述文」なのである。更にさかのぼって1986年教科書では視点が全く異なっており、「廬溝橋をめぐって激しい白兵戦を展開した」のは、7月8日に発せられた中国共産党の抗日の電文によって抗日戦争を「要求し」その「戦列に加わってきた」「全国人民の強力な支持の下に」展開したものであるということになっている（この電文のことは1992年教科書にはあるが、2001年教科書では削られた）。

大隊レベルの編成まで記され、小隊レベルの戦闘がかくも細かく描かれているのに、また日本兵1名の行方不明のことも書かれているのに、その兵の安否が判明する前に清水中隊が受けた、そしてこの事件の切っ掛けでもあり、日本軍が謝罪と責任を要求した当の案件でもある射撃のことは記されて

いない。『新しい歴史教科書』には射撃のことは書かれている。

「廬溝橋事変以後、日本軍は更に八一三事変を起こした」。日本では上海事変という。1937年12月、南京陥落。南京大屠殺は青地が掛けられた文章と写真が中心で本文はそれほど長くはなく、次のようである。「日本の侵略者は至る所で放火、殺人、強姦、掠奪、悪行の限りを尽くした。日本軍の南京占領後、南京人民に対して血なまぐさい大屠殺を行い、滔天の罪行を犯した。南京の平和な住民のある者は射撃練習の的とされ、ある者は銃剣練習の対象とされ、ある者は生き埋めにされた。戦後の極東国際軍事法廷の統計によれば、日本軍南京占領後6週間に手に寸鉄ももたぬ中国住民と武器を棄てた兵士30万人以上が虐殺された」。この数字について、日中歴史共同研究委員会の中国側座長の歩平は南京裁判のものとしている〔『朝日新聞』2009年12月25日付〕。これに写真4葉が付されている。青地が掛けられた部分は具体的な事例の紹介である。事例は4つ。12月15日の武器を棄てた兵士警官3,000余人に対する、16日の難民5,000余人に対する、18日の老若男女5万7,000余人に対する何れも機銃掃射と、12月に報道された向井・野田両少尉の100人斬り競争である。100人斬りには別途写真も付されているが、これには問題も指摘されている〔「百人斬り競争」『日本経済新聞』2009年8月13日付け参照〕。1992年教科書でも文章は同じであるが、写真は2葉で、100人斬りの写真もない。1986年教科書は、本文と青地の掛けられた部分の区別はなく、一括して本文扱いとなっている。そこから変更された文言や削られた表現もあるが、15日の事例と100人斬りの事例が加わって、教科書全体の分量が低減する中でも、文字数ベースでは315字から411字に増えている。変更については、例えば、「放火、殺人、強姦、掠奪（焼殺淫掠）」は1986年教科書では「放火、殺人、掠奪（焼殺搶掠）」であった。「搶」が「淫」に変わったのである。日本軍の蛮行の象徴として、南京が目されるのに従って、これはむしろ強化されている。日清戦争における旅順虐殺の記述の強化も、南京を過去に投影させて参照点としたからであろう。1995年9月3日の「抗日戦争勝利50周年」記念大会で江沢民は、日中戦争で中国人3,500万人が死傷したと演説した。従来、この数は2,168万人としていたものである〔清水 2003:168〕。

新しい高校の教科書でも「妊婦を輪姦した上に腹の中の胎児を切開して取り出し銃剣の上でもてあそんだ」などと書かれている。妊婦輪姦の話は以前の教科書にはあったらしいので、もしそうならば、ここで復活したことになる。但し、新しい教科書ではまず「日本の侵略者にも家庭があり、妻子があり、家人と一緒にいるときも楽しくうち解けていた」と記し、「日本軍人が中国に侵入する前に家族と一緒にいる」写真も掲載し、「何が日本の侵略者をして人間性から反人類的獣性に変ったのか？」という質問をしているのは新しいものである。

## 9.

第16課は「血肉は長城を築く」である。

この表題も隠喩的な表現となっているが、この課ではその後の日中戦争が描かれている。一般に日本の教科書では日中戦争の個々の戦闘が説明されることはないが、ここでは1937年9月の「平型関

大捷」と1938年春の「台兒庄戦役」と1940年8月の「百団大戦」が記される。

「平型関大捷」は9月末、察哈爾省から山西省に入る途中の第5師団に八路軍が多大の損害を与えた戦闘である。8月22日陝西省にあった共産軍は国民革命軍第8路軍に編成され、山西省北部の対日戦を担当していたのである。「台兒庄戦役」は山東省から江蘇省に入る手前にある台兒庄に突入した第10師団の福栄部隊との間で3月19日から4月6日まで連日の死闘を繰り返し、これを北方に「転進」せしめた戦闘である。それまで後退に後退を重ねてきた中国軍が初めて日本軍の進撃を止めた大勝利として宣伝し、武漢では炬火行列を挙行了したものである。「百団大戦」はこの年の初めから開始された華北での支配権の確立に成功した共産党が起こした集中攻撃で、8月20日、115個団（聯隊）の兵力が山西・河北の鉄道幹線を攻撃した。

そして最後は「中国人民と世界の反ファシズム勢力の強大な打撃のもとに、8月15日、日本の天皇は無条件降伏の宣布を余儀なくされた。八年抗日戦争の結果、中国人民はようやく偉大なる勝利を獲得し、台湾もまた祖国の懐に戻ったのである」と結ばれる。「9月2日、日本政府が同盟国に対して降伏文書を渡す」や「9月9日、侵華日本軍総司令岡村寧次、降伏文書に署名」、「台湾人民が抗戦勝利を歓迎慶祝」のキャプションをつけた写真もある。台湾の写真は2002年教科書に登場したものである。ミズーリ号での降伏文書への署名や南京での降伏調印は1992年教科書では本文に記載され、9月2日には「9月3日は中国抗日戦争勝利記念日である」という注が付されていたが、これはない。「練習問題」は日本が無条件降伏を宣布した日を問うものである。新しい高校の教科書でも、「抗日戦争」の課の導入のコラムは、8月15日の玉音放送の話である。帝国議会における「日本天皇投降詔書の宣読」の写真が添えられているのには驚く。国によって歴史が違うように、終戦の日も国によって異なるというが〔佐藤・孫編 2007〕、中国でも9月3日の記憶は薄れ、8月15日が記憶すべき日になって行くのかも知れない。

最後の「活動と探究」にある「アヘン戦争以来、中国は外国の侵略に反抗する戦争にずっと失敗してきた。例えば、甲午戦争、八国聯国侵華戦争……。今回、抗日戦争はしかし完全なる勝利をおさめたのである」はこのヒストリーを閉じるに相応しい言葉と思われる。例えるならば、押されに押されていた試合の最後に100ヤードの逆転タッチダウン・パスを通したようなものである。こうしてアヘン戦争以来痛々しくも傷つけられた愛国者たちの心は癒されるのである。これにチャレンジすることは彼らの心を再び傷つけることになる。そして付け加えるならば、その勝利は、司令塔に中国共産党を擁して初めてなし得たこととされるのである。

## 10.

教科書が「陳述」している中国近代の歴史は、「侵略と反抗」（第1単元のタイトル）から「中華民族の抗日戦争」（第4単元のタイトル）の勝利へとたく描き出された一本の道筋である。生徒の靴を軽くしようという中国版ゆとり教育で教科書の絶対的分量が削減されてもそれは変わらない、というよりも、「事実確認的」な文が削減縮約されて、いわばその解像度が低減した分、この一

本の大筋だけがむしろ浮き上がって見えるようになったとも言える。

侵略を資本主義に結びつけるドクトリンも、アヘン戦争に残されているくらいで、大幅に軽減した。それは改革開放政策による共産主義理論の無力化と世界市場への参入を背景としているのであろう。その中で、1994年には「愛国主義教育実施要綱」が党中央から伝達された。それ以外に侵略を説明する便利な理論がなければ、それは侵略者が侵略しようとしたから侵略したとする恒真文の論理にならざるを得まい。

しかも、教科書記述量の低減の中にありながら、本文ではない部分の比重はむしろ増して多彩になってきた。民謡は歴史家による「事実確認的」な陳述文ではない。これを読誦することは、事実の確認というよりはその行為の反復であり、その追体験を「遂行」することである。民謡の利用については、既に八路軍に文芸工作員がいて民謡を採集、農民への宣伝に利用し、これは人民解放軍にも継承されていたから、この工夫そのものは新しいものではないが、これは中学校生徒がかつての農民レベルの啓蒙の対象になったということかも知れない。映画の利用も同様である。『アヘン戦争』を観て「陛下、清は開国2百年来……ひとえに領土を広げてきました。領土を割譲し、賠償するのは国家の恥ですぞ」〔EQUIPE DE CINEMA 125:32〕という台詞に、清国もまた香港を侵略したのではないのかという感想を抱く可能性がある中で、感想を抱かせようとするのである。

「事実確認的」というべき本文においても、文章が削減される中でも、文学的な表現が増えまた細部にわたり活写され具体的な描写が書き込まれていく。しかし、事実との照合は重視されない。そうして、中国近代の「侵略」から「勝利」に至る歴史を生徒に身に付けさせる、つまり「遂行」させるのである。

## 【参照文献】

〔教科書〕

『義務教育課程標準実験教科書・中国歴史・八年級上冊』（第10次印刷）人民教育出版社、2009年。

『普通高中課程標準実験教科書・歴史1（必修）』（第10次印刷）人民教育出版社、2009年。

『普通高中課程標準実験教科書・歴史・選修・20世紀的戦争与和平』（第17次印刷）人民教育出版社、2009年。

小島晋治・並木頼寿監訳 『入門 中国の歴史 — 中国中学校歴史教科書』（世界の教科書シリーズ5）明石書店、2001年（『九年義務教育三年制初級中学校教科書 中国歴史第1～第4冊』、第1冊1992年、第2冊1993年、第3冊1993年、第4冊1995年）。

小島晋治ほか訳 『中国の歴史 — 中国高等学校歴史教科書』（世界の教科書シリーズ11）明石書店、2004年（『全日制普通高級中学教科書（試験本）中国古代史（限選）第2版、2000年、『全日制普通高級中学教科書（試験修訂本・必修）中国近現代史』上・下冊第2版、2000年）。

関根謙編 『中国の教科書の中の日本と日本人』一光社、1988年（1980年から試用、1986年に正式制定された教科書）。

西尾幹二ほか『〔市販本〕新しい歴史教科書』扶桑社、2001年。

石井進ほか『詳説日本史B 改訂版』山川出版社、2008年。

佐藤次高ほか『詳説世界史 B 改訂版』山川出版社、2008年。

〔その他〕

『EQUIPE DE CINEMA』125、岩波ホール、1997年。

有田芳生 『私の家は山の向こう — テレサ・テン十年目の真実』文藝春秋、2005年。

伊藤亜人 『文化人類学で読む日本の民俗社会』有斐閣、2007年。

臼井勝美 『日中戦争』中央公論社、1967年。

佐藤卓己・孫安石編 『東アジアの終戦記念日 — 敗北と勝利のあいだ』筑摩書房、2007年。

参謀本部 『満洲事変史 第8巻満洲ニ於ケル支那軍掃蕩戦』上、1933年。

清水美和 『中国はなぜ「反日」になったか』文藝春秋、2003年。

原田敬一 『日清戦争』（戦争の日本史 19）吉川弘文館、2008年。

山本四郎 「小川又次稿『清国征討策案』（一八八七）について」『日本史研究』75、1964年。

# Historical Perceptions in Chinese Textbooks

Masao Mori

## Abstract

The purpose of this essay is to show Chinese historical perceptions on the modern era by analyzing old and new history textbooks. Besides the content of the textbooks, we look into how they are presented.

Previous textbooks stressed, in accordance with the Lenin doctrine, that invasions are essentially caused by capitalism. In the new textbook used experimentally since 2001, this is no more stressed, except in the case of describing the Opium War. Euphony and fine descriptions as in storytelling have increased instead. By doing so, the new textbook makes pupils realize the Chinese historical perceptions that she had been a victim of invaders for a century but they eventually had glorious victory against them, which renders them national pride.